



高校教育のなんであるかを悩む日々（特集 青少年問題）

伊藤, 武夫

(Citation)

社会学雑誌, 1:153-156

(Issue Date)

1984-03-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010706>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010706>



高校教育のなんであるかを悩む日々

伊 東 武 夫

生徒：「なんでこの暑いのに学校の草取りなんかしなければならんのやろう。」

先生：「君たちの学校だろう。自分たちで草抜きしたり、掃除をするのはあたり前のことじゃないか。」

生徒：「小学校や中学校では、PTAのおばさんたちが学校の草抜きなどやってくれていたよ。高校でもそうやってたら、こんな暑い日に学校へくることなんかなかったのに……。」

先生：「ゴタゴタいってないで、早く作業にかかったらどうだ。割当てが済むまでは時間延長だぞ。」

生徒：「ちゃんと取っているよ、これ！」とやって一本抜き取った草を先生の方に見せている。

生徒はさらにつづけて「こんな草取りをしているよりも、バイトの方がもっといい。オレのところは、クーラーも入っているし暑ければちよっと一休みだ。それに一日、三千円になるんだ。お前とこはいくらだ。」

生徒たちは三、四人ずつかたまっては、作業をするでなし、とにかく暑いことを口実にのろのろと緩慢な動作をくり返

している。先生はそれ以上話すのをやめて、黙々と草をむしり取っている。先生一人で生徒一〇人分の作業量である。一言いえばいくつかの文句が返ってくる。それよりも、こちらが範をしめせばそれに習ってくるのではないかという淡い期待をかけてしまう。そして、その期待は見事に裏切られ、なんともいえない空虚さとわびしさでもって返ってくるのである。「今の生徒たちはどうしてこんなに動作がゆっくりしているのだろう」、「どうして、しんどい作業をしたがらないのだろう」、「自分たちの直接の利害にかかわることに関しては敏感に反応をしめすのに、自らの義務ということになるとまったく反応が鈍ってしまふ」など、汗をふきながらでの先生方のぐちが出る。これは、八月一日、夏季休業中の全校登校日の清掃作業での一コマである。

現在私の勤める学校は、去年（昭和五八年）の四月に開校された新設の県立普通高校で、生徒は一年生八クラス、計三五七名が在籍する。教員は校長、教頭も含めて二〇名。

すべてが新設の意気に燃えての着任であった。しかし、冒頭の例にあげたようにその指導は既設校で見られる問題とほとんど変らない。

「積極的に作業をすることを嫌う生徒」、「自己中心的で、他に与えることは極めて少なく与えられることのみ大きい幼児的思考」、「自己の要求が入れられないとすぐにカンシヤクを起こし（これは大人文化に対するアンチテーゼとしての反抗ではない）、目先の欲求充足に走ろうとする未成熟さ」、「パーソナリティの形成過程における社会性の欠如」など、このような問題をかかえた生徒をいかに教育していくかということである。

「積極的に作業をすることを嫌う生徒」、このことは学習することについても同じことがいえる。課題を出され、与えられなければ何もすることができない。小学校入学以来、ことあるごとに勉強せよと言われて耳にタコができて、それが十分になされないままに学習塾に追い込まれる。それで親はなんとか安心しようとする。そして親はその費用とローンなどのためにパートに出ることになる。庭の草取りといえば除草剤まかせ。子供に取らせても十分ではないという。子供の作業よりも薬の方に信頼をおくという態度こそが問題であるのだが……。小学校の頃はPTAのおばさんたちが……。といった生徒、その生徒の言にうなずくものがかなりいたことも事実である。小学校の先生の話によると、すでに十数年前より児童のケガの防止と父母

と学校側との交流の場としてこのような行事が行なわれるようになったこと、そしてそれが中学校にまで波及していること、最近ではこのことが子供を甘やかしすぎることになつていのではないかという反省や、せっかくの日曜日をこんな作業に奉仕するのは実に無駄骨が多いから業者にたのんでやってもらつてはという意見も出ていふることであつた。業者まかせの意見を耳にするとき、生徒が積極的に作業をしたがらないのも無理からぬことである。

視点をかえて、彼ら生徒の行為がなんらかの形で金銭で報われるということになるとまた話は別である。夏休み前の調査で三五七名中、百名をはるかにオーバーする数の生徒がアルバイトを希望している。実数は百名前後だが、夏の暑い日ざしの中で、喜々として働く姿。草取りの作業からはとても想像もつかない姿である。なにがなんでもお金の手にはいる、そのお金を自分で自由に使えるという。「職業人としての体験と親の仕事を理解する良い機会」、「仕事に対する責任を身につけることができたら」、「アルバイトを通じて働くことのきびしさを身につける」、「働くことによつてお金の大切さを身につける」など、これらは保護者のアルバイト許可願に対する意見である。それは「みんなもアルバイトをしているよ」という子供たちの要求の前にたじたとつてしまった保護者の悲鳴のようである。生徒たちは親の考えとは別に、まとまったお金を手にすることによつて自分のほしいものを買つたり、旅行のための

費用にとというのが大半である（ごく少数のものの中にはアルバイトについてまじめに考えているものもいるけれど）。だから登校日（8/10）に指導したK男（一年生）の例に見るように、収入を得て最初にすることが頭髮のパーマであった。彼は私に頭髮の件で注意されたとき、「とにかくかけたかったので」というだけであった。その行為が校則違反であってもあえてやりたいことをしたまでだというのである。そのために、暑い日々をせっせと無遅刻・無欠勤であった。勤労体験の何であるかよりも、その報酬をいかに自己の欲求充足にあてるかが先決であった。それはちょうど、ローン返済のためになりふりかまわずパートに出る共働きの姿に通ずるものがあるのではないか。自己の欲求充足のために働くことなのであるかを考える。高校生としての学習と労働の意義づけを考えてみる。職業人として日常生活の中での労働の意味を考える。そのことを実際に教えてくれたのは両親でもなく、学校の先生でもない。彼ら生徒たちを雇い入れた職場の責任者たちであるという皮肉な結果もでているのである。さきのパーマをかけたK男は、その翌日から職場に出ることをやめさせられている。「自己中心的で、自分の要求が入れられないとすぐにカシヤクを起こす生徒」、「もの事に対してがまんをすることのできない生徒」。これらの問題行動をもつ生徒は、共通して、自分の行為が他にどんな影響を与えるか、いいかえれば他に対する配慮に欠けている。いわゆるパーソナ

リティの形成過程における社会性に欠けているのである。六月の最後の土曜日と体育の授業時に、担当教師に対してソフト用のバットを振りかざして暴言をはいたM男。彼は母親が現在の父親と再婚するときの母親の連れ子であり、今年の四月に赤ちゃんが生まれるまでの十年近く自分を中心としてすべてが展開していた。しかし、赤ちゃんが生まれたことによつてこれまでの状況が一変したとき、彼は家庭の中での自分の位置づけを発見することができなくなつてしまつたのである。このイライラが日常の学校生活の中で、教師に対する反抗となり、ついにはこのような行為となつてしまつた。しかし、彼はいつこうに平気であり、あやまればそれでおわりであるとの計算をし、暴力行為にさえいたらなければそれによしとの考え方をもつていたのである。二〇日間の家庭謹慎の中で、彼は実にしおらしく、学校への復帰を待つのである。「一日一日が実に長く感じられます。学校へ行きたい、学校へ行きたい、学校へ行きたい。最近ノイローゼ気味になることがあります。そのおかげで、課題などなにも手につきません」（謹慎一〇日目の反省日誌より）。社会化に欠ける生徒は、謹慎期間中の課題すら十分に完成することができない。自らの行為に対してどのような責任を取ることができなるかを考えるのではなく、ただじつと時間の経つのを待とうとする。だから、一日が長く／＼感じられ、そしてついに、ノイローゼになると書かねばならなくなつてしまうのである。それはたんに

子育ての失敗ということだけに帰せられる問題ではなく、現代を生きる大人の生き方にもかかわる問題ではないか。したたかに生きることのできる強靱な精神をどうしてつけてやることができるか、それが問題である。

青年中期にさしかかった生徒たちが、その発達段階に応じて正常な発達をしてきていないのはすべての生徒に共通する特徴である。問題行動を起こさない真面目な生徒たちが（大部分の生徒はこの部類に属するのであるが）、自らの自浄能力でもって、問題行動を超えるだけの力を発揮することができない。たとえば、生徒集会やHR討議などにおいて、こちらの問題提起に対してほとんど反応しようにせず、ただじつと黙っている。彼らは、たとえ発言したとしてもどおってことはない。それよりも、発言したことによって仲間からはみ出ることの方をおそれるのである。

問題行動を見ぬふりをすることは、自分がたとえ直接の被害を受けないとしても、社会的不正義がまかりとおり、他の誰かの人格的自由や自立が犯されることであり、ひいては自分自身が加害者となるおそれのあること。また、真面目に人間的なものを求めようとして、行動に移せないで悩んでいる生徒に対して、もう一人の自分と共感できる自己を発見させてやることの必要性を痛感する。そのためには、日常生活の中で生徒ひとりひとりが、また生徒と教師が、親と子供とがもつとまのままでぶつかり合うことがなければならぬ。「子供の犯した行為は親も同罪です。

どうしたらつぐなえるのか、反省を行動に移すにはいかにしたらよいものか、まだわかりません。子供と一緒に悩み苦しんでいます。先生方のお力を借りたいと思います」(万引行為をした生徒の反省日誌の保護者の欄より)。子供が、生徒が、問題行動を起こしてみてもはじめてどうしたらいいのかを考えざるをえなくなる。そうではなくして、彼ら生徒たちがどのような過程の中で成育してきたのか、そして将来に対してどのような期待をもっているのかを的確につかみ、父母や地域の要求に答えていかなければならない。新設一年目の生徒たちを前にして、高校教育のなんであるかを悩む毎日である。

(三重県立高校教諭)